KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

中学校・高等学校の音声教育への一考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長谷川, 博 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学短期大学部
URL	https://doi.org/10.18956/00006266

関西外国語大学 研究論集 第83号（2006年３月）
Journal of Inquiry and Research, No.83 (Mar. 2006)

中学校・高等学校の音声教育への一考察

長谷川　　博

１．はじめに

ある日のこと、電話で話をしている人の返事「はい」が、何通りも違っていることに気が付いた。ある時は「はい！」と元気よく答えていたかと思えば、ある時は「はい」、「はい」と低い声で、ただ相づちを打っていたに過ぎず、またある時には、「は～イ？」のように「イ」で声を上げ、怪訝そうな様子で答えていた。

（日本語の「はい」が英語の Yes に必ずしも相当するわけではないが）印刷された文字では Yes は一通りの意味しかないように思われるけれど、話し言葉では次の Yes のように異なった文脈にふさわしい７通りの言い方が考えられる。

１）低下降調・・・（声が中程から下に降りる調子で）

＼Ｙｅｓ　　「はい（そうです）」

２）高下降調・・・（いちばん高いところから一気に下まで降りてくる調子で）

＼Ｙｅｓ　　「はい、そうです」の意味であるが、明るい感じを与え、意味も強くなる。

３）上昇下降調・・（中程から一度声を一番上まで上げ、そこから一気に降ろす調子で

＾＼Ｙｅｓ！　　（非常に驚いたり、感銘を受けたりして強調的に）「もちろんそうですとも」とか「そうですか、本当に参りました」

４）低上昇調・・・（一番下から中程まで声を上げる調子で）

／Ｙｅｓ　　「それで」と相手に話を促す。

５）高上昇調・・・（中程から一番上まで声を徐々に上げていく調子で）

／Ｙｅｓ？　　「いいとおっしゃったんですか」相手の返事を確認する。

６）下降上昇調・・（やや高めから一気に下げ、少ししゃくり上げる調子で）

＼／Ｙｅｓ　　「それはそうですけれどもしかし・・・」と言外にその反対の意味をほのめかす。抗議の気持ちや物事を比較対照して強調する。

7）中平行調・・・（中程の高さで、声を平坦に同じ高さで続ける調子で）

－Ｙｅｓ　　（軽い気持ちで）「ええ」という感じである。

（東後『英会話のリズムとイントネーション』金星堂、pp.24～26）

このように、Yes のように簡単そうに見える言葉でもこれだけの「音調」があるのだから、音調がいかに複雑であり、正確に区別しないと相手の感情を傷つけたり、相手がこちらの気持ちを誤解したりすることが、大いにありうるのである。

ところで、2004年の「研究論集」での発表までは、英語科教育法、英語音声学の最初の授業で、本学入学以前の英語教育で「発音記号についてどの程度教えられたか」「発音記号を頼りにどの程度自信を持って単語を発音できるか」といった入学以前の音声教育の一端を知る程度にとどまっていたのを今回は、具体的に「どの発音記号は自信を持って発音できるのか」に始まり、中学や高校での音声教育で取り扱われた項目の実態をよく知り、本学での授業がより一層効率よく展開できるようにとの思いで、入学以前の音声教育を分析した。

なお、高等学校学習指導要領（平成元年改訂、平成６年から実施）の「総合英語」２．内容の（１）発音（P.89）には次のように書かれている。

「音声については、中学校において、

（ア）現代の標準的な発音、　　（イ）語のアクセント、

（ウ）文の基本的な音調、　　（エ）文における基本的な区切り、

（オ）文における基本的な強勢

の５項目について指導している。「総合英語」では、この中学校のうえに立って、目標の「自分の考えなどを英語で表現する能力を伸ばす」ための発音指導を行なうことになる。

指導に当たっては、現代の標準的な英語により、中学校の上記の５項目に習熟させるとともに、弱音、音の脱落、連結、同化、音質・音量の変化、リズム、イントネーション、速さなどを生徒の実態に応じて取り上げることになろう。」[1)]

従って、「研究ノート」では、上記の（ア）～（オ）及びこれまでの「研究論集」では触れていなかったリズムに関してこれまでの音声教育を分析したが、話し言葉で重要な働きをする「音調」が中心となった。

２．発音記号一覧

下記のように、辞書によって多少表記が異なるものがあるので、いろいろの学生がこれまでに使用したと思われる辞書を考慮して可能なかぎりの発音記号をあげる。

（池田他２名『英検・TOEIC に役立つリスニング』南雲堂、P.8）

なお、(　　) 内の数字は、それぞれの発音記号を頼りに単語を発音できる割合を示す。受講者数は、一般音声学（学部１回生43名)、英語音声学（短大１回生67名）合計110名である。

１．単母音

1)	/iː/	…	73(66.4%)	5)	/ɑː/	…	51(46.4%)	9)	/u/ʊ/ʊ	…	45(40.9%)
2)	/i/ɪ/	…	75(68.2%)	6)	/ɑ/	…	57(51.8%)	10)	/ʌ/	…	21(19.1%)
3)	/e/	…	87(79.1%)	7)	/ɔː/	…	34(30.9%)	11)	/ə/	…	28(25.5%)
4)	/æ/	…	67(60.9%)	8)	/uː/	…	59(53.6%)	12)	/əːr/ə/əː/	…	14(12.7%)

２．二重母音

1)	/ei/eɪ/	…	76(69.1%)	6)	/ir/iər/iə/ɪə/	…	16(14.5%)
2)	/ai/aɪ/ɑɪ/	…	73(66.4%)	7)	/er/eər/eə/ɛə/ɛər/	…	20(18.2%)
3)	/ɔi/ɔɪ/	…	21(19.1%)	8)	/ɔr/ɔə/ɔːr/oːr/	…	13(11.8%)
4)	/au/ɑʊ/	…	58(52.7%)	9)	/ur/uə/ʊə/ʊə/uər/	…	7(6.4%)
5)	/ou/oʊ/oʊ/	…	67(60.9%)				

３．子音

1)	/p/	…	69(62.7%)	9)	/θ/	…	55(50.0%)	17)	/dʒ/	…	25(22.7%)
2)	/b/	…	67(60.9%)	10)	/ð/	…	26(23.6%)	18)	/m/	…	57(51.8%)
3)	/t/	…	70(63.6%)	11)	/s/	…	72(65.5%)	19)	/n/	…	62(56.4%)
4)	/d/	…	66(60.0%)	12)	/z/	…	67(60.9%)	20)	/ŋ/	…	29(26.4%)
5)	/k/	…	70(63.6%)	13)	/ʃ/	…	37(33.6%)	21)	/l/	…	44(40.0%)
6)	/g/ɡ/	…	62(56.4%)	14)	/ʒ/	…	18(16.4%)	22)	/r/	…	46(41.8%)
7)	/f/	…	72(65.5%)	15)	/h/	…	37(33.6%)	23)	/j/	…	39(35.5%)
8)	/v/	…	63(57.3%)	16)	/tʃ/	…	21(19.1%)	24)	/w/	…	41(37.3%)

ところで、こちらが予期していたように、「アンケート」直後の質問で明らかになったことは、学生たちが知っていると答えた「発音記号」の知識は、

/iː/ =「イー」、/i/ =「イ」、/uː/ =「ウー」、/u/ =「ウ」、/ʌ/ =「ア」、/ə/ = 弱い「ア」である。

英語の音と日本語の音が一対一で対応すると思って［教えられて］いたのである。

/iː/ は、確かに「イー」に近いが、「イー」より唇を左右に引かないと /iː/ にならない。/i/ は、ただ単に /iː/ を短くしたものではなく、質的にも異なる音である。「エの口の構えでイを発音せよ」と言われるほどで、イとエの間のはっきりしない音である。従って、発音記号も簡略記号では /i/ を用いるけれど、精密記号では /ɪ/ を用いる。

/uː/ は、口笛を吹くときのように、唇をしっかりと丸めて突きだして発音される音であり、/u/ は、唇をゆるめて発音し、オの響きがある。従って、簡略記号では /u/ であるが、精密記号

では /ʊ/ で表される。日本語の「イー」と「イ」、「ウー」と「ウ」は長さで区別されるが、英語の /iː/ と /ɪ/、/uː/ と /ʊ/ は発音の仕方も音質も違う別種の音である。

/ə/ にいたっては「弱いア」だけでは全く処理できない非常に特異な弱母音で、アクセントの弱いところでは、すべての母音字が /ə/ と発音され、日本語のどの母音の範囲にも入らない。[2)]

3．本学入学以前の音声教育

Q 1）発音記号を学んだ時期

（1）中学校　29(26.4%)　（2）高校　30(27.3%)　（3）中・高両方　25(22.7%)

なお、学校で学ばなかった学生は、どこで、どれくらい発音記号を学んだか？

主な場所（塾／自宅［独学］）　16(14.5%)

Q 2）発音記号を学ぶのに費やした時間（50分授業を1回と数えて）

（1）1回（50分）　29(26.4%)　（2）2、3回（100～150分）　46(41.8%)

（3）4回（200分）以上 19(17.3%)　（4）時間不明／無回答　16(14.6%)

Q 3）日本語［東京方言］で、例えば「ハシ」と発音する場合、「ハ⌉⌊シ」のように「ハ」を「シ」より高く発音すると「箸」の意味になり、「⌊ハ⌉シ」のように「シ」を「ハ」より高く発音すると「橋」の意味となる。（日本語は「高低アクセント」と呼ばれる）

これに対して英語では、“increase” を例にあげると、in- に強勢が置かれると「名詞」に、-crease に強勢が置かれると「動詞」となる。（英語は「強勢アクセント」と呼ばれる）

日本語が高低アクセント、英語が強勢アクセントであることを知っている学生　59(53.6%)

Q 4）次の単語で強く発音する箇所を指摘しなさい。（正解率）

(1)アクセサリー	ac·ces·so·ry	31(28.2%)	(2)バクテリア	bac·te·ri·a	92(83.6%)
(3)カリキュラム	cur·ric·u·lum	30(27.3%)	(4)ダイヤモンド	di·a·mond	92(83.6%)
(5)エネルギー	en·er·gy	82(74.5%)	(6)ハンバーガー	ham·burg·er	80(72.7%)
(7)マネージャー	man·ag·er	71(64.5%)	(8)ナショナリズム	na·tion·al·ism	29(26.4%)
(9)オーケストラ	or·ches·tra	43(39.1%)	(10)ピアノ	pi·an·o	99(90.0%)
(11)レフェリー	ref·er·ee	28(25.5%)	(12)センセーション	sen·sa·tion	99(90.0%)
(13)バイオリン	vi·o·lin	59(53.6%)			

（アクセントのある音節）(1)-ces-, (2)-te-, (3)-ric-, (4)di-, (5)en-, (6)ham-, (7)man-, (8)na-, (9)or-, (10)-an-, (11)-ee, (12)-sa-, (13)-lin

外国語をカタカナ表記する弊害については、本学研究論集（第68号）に発表したが、それを借用して補足説明をすると次のようになる。

例えば、「コミュニケーション」を取り上げると、これは英語の communication をカタカナ表記したものだが、［kəmjù:nɪkéɪʃən］を正確に表記していない。

先ず、/kə/ の /ə/ は、日本語の「ア」の口の構えから口をほとんど閉じたくらいにわずかに開き、舌や唇の力を抜いて、弱く曖昧に発音する母音で、もとの/ɔ/ の響きを多少留めている /ə/ である。従って「kəmjù:nɪkéɪʃən］の /kə/ は「カ」とも「コ」とも聞こえる音であるが、どちらかに表記するとすれば、小さく「カ」とでも書くより致し方がなかろう。

次に /ni/ の /i/ であるが、注の２)、竹林『・・発音に強くなる』岩波ジュニア新書（p.76）から再び引用すると、

「綴り字に引かれてイと発音してはいけない。「イ」とも「ウ」とも「ア」ともつかない、まったく曖昧な音色で」

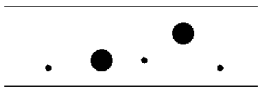
/ni/ は「ニ」とも「ヌ」とも「ナ」ともつかない音になる。

最後に /kei/ であるが、５つの音節の中で最も「強く」、「高く」、「長く」発音され、さらに、ここで声の高さが「急激に下降する」ことになる。

これを下図のように示すと差が一層明らかになる。

コミュニケーション

○ ○ ○○○ ○ ○



kə mjù: nɪ kéɪ ʃən

コミュニケーションは、ほぼ同じ強さと速さで音節（○）が発音されるのに対して、

communication の発音は高低、強弱、長短が歴然としている。なお、（●）は第１又は第２強勢、（•）は弱強勢を示す。

英語におけるアクセントは次の３つの要素を含む。

アクセントのある音節は、（１）強く、（２）高く、（３）長く、発音する。[3)]

３つの原則と音節全体にアクセントをつけるということを念頭において、はっきりと何回も発音練習をすると単語を正確に発音できるようになる。例えば、Ｑ４）のカタカナ語から

ac·cés·so·ry　dí·a·mond　pi·án·o　etc.

図示することにより、強勢のある箇所を明示する。（●）の音節を強く高く長く発音する。

なお、日本で発売されている英和辞典「グローバル、ジーニアス、ライトハウスなど」では強勢記号は母音の上に書いてあるが、これは便宜的なもので、実際にはその母音を含む音節全体が強勢を受けている。英英辞典［Oxford *Advanced Learner's*, など］にはそのように表記してある。

例）college/kɑ́lɪʤ|kɔ́l-/（英和辞典）、/ˈkɒlɪʤ||ˈkɑː-/（英英辞典）

（補足）カタカナ英語と英語に関して、加島他『カタカナ英語辞典』研究社、（p.v）には次のようなことが書いてある。「厳密に言えば、すべてのカタカナ英語は元の英語からずれている。その「ずれ」の第一は発音である。英語からカタカナ英語になると、必ず発音が日本式に転化してしまう。」

なお、英語を母語としている人達にとっては発音記号はそれ程必要ではないだろうが、英語を外国語として学習している者にとっては、特に未知の語に対しては発音記号の知識は必要である。しかし、中学や高校で音声教育をあまり受けていない場合には、たとえば、発音記号の［kəmjù:nɪkéɪʃən］から p.191 の図で示した「高低」や「強弱」まではほとんど頭に浮かばないのが普通であろう。

Q５）二重母音を発音する際、例えば、eye/aɪ/, owe/oʊ/, ear/ɪə/ において、前の母音と後の母音を発音する強さの割合は下のうちどれか。　（正解率）

（１）前の母音の方が７対３とか８対２の割合で強い	90(81.8%)
（２）後の母音の方が３対７とか２対８の割合で強い	12(10.9%)
（３）前と後の母音の強さが同じ	3(2.7%)
（４）無回答	5(4.5%)

多くの学生は、二重母音に関して知識としては大いにあるが、実際の発音は前の母音と後の母音をほぼ同じくらいの長さで発音しているのが現実の姿である。

（参考）長澤『教師の発音』（開文社、p.73）に、二重母音の発音に関して

例えば、/ai/ の場合、次のような説明がある。

「日本語の「アイ」（愛）では「ア」と「イ」がほぼ50パーセントずつのアクセントを分け持つのに対して、［ai］では［a］が70パーセント、［i］が30パーセントぐらいの気持ちである。」

（補足）英語の二重母音は、二つの母音記号で示されているけれど、一つの単位として発音される。二重母音を構成する二つの母音は同等ではなく、前の母音の方がより強く、より長く発音され、後の母音は弱く、短く消えていくように発音される。即ち、後の

母音は舌が移動する方向を示しているに過ぎないのである。

確かに、日本語にも「あう（会う）」、「おう（追う）」などのように、英語の二重母音に似ているものもあるが、これらはただ単母音を別々に、同じ強さで発音するので、英語の二重母音とは性質が違うものである。

Q 6）語に強勢があるのと同様に、文にも強勢がある。特別な強調や対比がない次の文を一息で言う〔読む〕時、どの箇所が強いか、その箇所を数字で指摘しなさい。なお、強い箇所は1箇所とは限らない。第一強勢［記号（´）］、第二強勢［記号（ˆ）］である。

I bôught this **dréss** yêsterday.　　正解率　32(29.1%)

1　2　　3　4　　5　6　7

cf.　A: Whên did you bûy this dréss?　B: I bôught it **yésterday**.

1　2　3　4　5　6　　7　8　9　10　11　12

正解率　5(4.5%)　　正解率　65(59.1%)

通常、一つの意味のまとまりには一ヶ所文強勢を置くが、それは文や句の末尾か、それに最も近い内容語である。上の文では、内容語である bought, dress, yesterday 3語に強勢が置かれるが、文全体の第1強勢は dress に置かれ、bought と yesterday の2語が第2強勢ということになる。

（補足）大塚他『英語音声学の基礎：理論と実践』北星堂（p.101）

「yesterday, now, there といった時や場所を表す語が、文修飾の副詞として文末もしくはポーズの直前にある場合、それらを特に強調する必要がなければ、第2強勢にとどめておくのが普通である。その場合には、もう1つ左にある内容語が第1強勢を受けることになる。」

もっとも、cf. では yesterday が第1強勢になっているのは When にたいする答えとなっているためである。

（参考）文を構成している単語の中には、強勢を受けるものと受けないものがある。原則的に、強勢を受けるのは「内容語」、受けないものが「機能語」である。内容語とは、名詞、動詞、形容詞、副詞など「情報を伝達する上で重要な意味をもつ語」である。それに対して機能語は、前置詞、接続詞、be 動詞、助動詞など主に「文法的な関係を示す語」である。

例）She **gives** a lot of **work** to us.（太字は内容語、それ以外は機能語を表す）

ただし「内容語は強勢を受け、機能語は強勢を受けない」というのは、あくまでも原則である。機能語でも、それが強調される必要があれば、強勢を受けて強く発音される。

例）This is not your book, but mine.（対比を受ける語が第1強勢を受ける）

（補足）文中の語を強勢をもつ語ともたない語に大別したとしても、それは英語に「強い」と「弱い」の2種類の強勢しかないということではない。人間の聴覚判断力の限界を考えて、強勢は、最も多い場合で、4種類に分類される。第1強勢と第2強勢が文強勢になりうる強勢に相当し、第3強勢［記号（ˋ）］と第4強勢［記号（ˇ）］が文強勢になりえない強勢に相当する。（長澤『教師の発音』p.92）

ところで、最も強い第1強勢に次ぐ第2強勢であるが、第1強勢と大体同じ強さで、ただ重要な高低変化を伴わないだけ弱いということである。

Q 7）次の各組の語句は、強勢の強さにより意味が変わる。強勢記号から判断して、意味の差を述べなさい。

a.　a rácing càr「競争用自動車」

b.　a râcing cár「競争している自動車」

（正解率）a. 40(36.4%), b. 21(19.1%)

［a, b 共正解 17(15.5%), a と b を逆に理解している解答 22(20.0%) もある］

（補足）複合語と句のストレスの違い

文字で表された場合に全く同じ2語から成る複合名詞と名詞句は、強勢の位置の違いによって発音上区別される。

複合名詞（´＋ˋ）		名詞句（ˆ＋´）	
blackboard	（黒板）	black board	（黒い板）
greenhouse	（温室）	green house	（緑色の家）
hot plate	（料理用鉄板）	hot plate	（熱い皿）
dancing girl	（踊り子）	dancing girl	（踊っている少女）
sailing ship	（大型帆船）	sailing ship	（航行している船）
smoking room	（喫煙室）	smoking room	（煙の出ている部屋）

（片山他『英語音声学の基礎』研究社、(p.85) その他から収集）

Is Scott the clinic's héad dòctor or hêad dóctor?（精神科医それとも医長）

Is he really a grándfàther or a grând fáther?

（おじいさん それとも 威厳のあるおとうさん）

（J. Donald Bowen 著／河野守夫訳『英語発音の型』金星堂、p.79）

Q 8）英語は次に示すように、強勢が置かれている音節（●）は、強く高く長くゆっくりと発音され、強勢が置かれていない音節（•）は、弱く低く短くすばやく発音される言葉で、強勢

のある音節が「ほぼ等間隔」で繰り返されることによりリズムが生まれる言語で、このリズムを「強勢リズム」と呼んでいる。それに対して、日本語の場合は、音節の一つ一つをほぼ同じ強さと速さで発音し、それによってリズムが生まれる。このようなリズムは「音節リズム」と呼ばれる。日本語の音節（○）の長さは感覚的に一定である。

（英語）　The children are playing baseball in the park.

・●・・　●・　●・・　・●

（日本語）こどもたちはうんどうじょうでやきゅうをしている。

○○○○○○○○○○○ ○ ○○○ ○ ○○○○○○

ところが、このようなリズムの違いについて中学や高校で学んだ学生は、25人（22.7%）に過ぎず、83人（75.5%）［4人のうち3人］が学んでいなかったのである。

英語を母語とする人は、上の文において child-, play-, base-, park の音節を比較的強く発音するけれど、日本人学習者は、すべての音節を強弱を付けずに等間隔で話し「読み」がちである。その結果、不自然な英語になり、英語を母語とする人に理解されないことになる。

J. D. O'Connor も次のように述べている。

「すべての音節が同じ長さをもっている言語の話者にとっては、英語のリズムがかなり難しいだろうし、英語のリズムを身につけるにはかなりの努力が必要である。仮に英語のすべての音節が同じ長さであるとすれば、機関銃を発砲する（machine-gun firing）のような感じになり、発話を理解するのが大変である。」

Better English Pronunciation (Cambridge Univ. Press) (p.126)

Q 9）音調に関する質問

特に強調したり対比することなく普通に話す［読む］場合、次の各文は下降調（記号：＼）か上昇調（記号：／）か、記号で示しなさい。

		（正解率）
(1) Does the girl live with her family?	（／）	100(90.9%)
(2) What a lovely girl she is!	（＼）	76(69.1%)
(3) What is the matter with your finger?	（＼）	71(64.5%)
(4) I beg your pardon?	（／）	102(92.7%)
(5) May God bless and keep you always!	（＼）	76(69.1%)

（補足）音調の三つの主な役割：

（1）疑問文と陳述文を区別するというような文法的な機能

a) I beg your pardon? （／）（恐れ入りますがもう一度おっしゃってください。）

b) I beg your pardon. （＼）（ごめんなさい）

（２）話者のいろいろな意図や微妙な感情を伝えようとする心情的態度を表す機能

a) Good morning, students.（＼）（無愛想・冷たい感じ）

b) Good morning, students.（／）（親しみのある感じ・柔らかな調子）

（３）強調などを表す指示的な機能

Your room is much bigger than my room.（your に強勢が置かれて /jur/ とはっきりと発音される。これは、my/mai/ と対比したいために、your に特に強勢を置いているからである。）　（（２）と（３）は杉森他『音声英語の理論と実践』英宝社、p.124）

（補足）音調の基本的な型：

（１）下降調…断定とか完結を表すいわば「言い切った」心的態度を伝える。

a) I went to the station.（平叙文）　b) What a wonderful boy he is!（感嘆文）

c) Open the door.（命令文）　d) What's the matter?（wh- 疑問文）

e) May the Queen live long!（祈願文）　f) Isn't it a lovely flower?（修辞疑問文）

（注）① wh- 疑問文であっても、文尾を軽くあげて発音すれば、やさしさとか親近感が加わる。例）What's your name?

② 聞き返しの場合は、wh- 疑問文であっても、上昇調になる。

例）What did you say?（「今何といった」）

（２）上昇調…疑問や未確定の要素や依頼を表すのに用いる。

a) Do you have any idea?　b) Is he going to the party?

c) Will you plese open the door?

（３）中間調または平坦調…よく未完成型と言われるように、文が途中で切れた感じになる。つまり、断定するのではなく、未定の心理状態が表された話が続く感じになる。軽く上昇調になる。

a) Goodbye.　b) good night.　c) Close the door.　d) Now do it again.

上記以外に、様々な感情や微妙な違いを表す場合として、

（４）下降上昇調…躊躇、疑い、不安、可能性、励ましなど：ある意味で未完結な表現であり、確実でない曖昧な感じをだすための音調である。

1. Well, I can sing this ╲╱ song.（躊躇：まあ、この歌なら歌えるだろうが…）

cf. Well, I can sing this ╲song.（普通）

2. Is that ╲╱ true ?（疑い：本当なものか）　cf. Is that ／true ?（普通）

3. I think I can make him give it ╲╱ up.
（不安：彼にそれをあきらめさせられると思うけど…）

cf. I think I can make him give it ╲up.（普通）

4. He could do ╲╱ it.（可能性：やればできるんじゃない…）

cf. He could do ╲it. （普通）

5. Don't worry. It isn't so ╱ serious.
（励まし：心配しないで。そんなに重大じゃないんだから…）

cf. Don't worry. It isn't so ╲serious. （普通）

（緒方『英語音声指導ハンドブック』東京書籍、pp.158,159; pp.169 その他から収集）

Q10）次の a), b) の 2 文を「音調記号」から判断して違いを述べなさい。

a) He ―explained things ╲wisely.「彼は事情をうまく説明した。」

b) He ╲explained things, ╱wisely.「彼が事情を説明したのは賢明なことだった。」

（正解率）a) 35(31.8%), b) 2(1.8%) ［a) b) 共無回答 39(35.5%)］

W. R. Lee は、*An Intonation Reader* (p.63)（以後、Lee:*Intonation* と表記）の中で「文 a) は、He explained things in a wise way. の意味で、文 b) は、It was wise of him to explain things. の意味で、文 a), 文 b) の区別は、文字の場合はコンマにより、音声の場合は音調の助けにより区別される」と説明している。文 a) では ....explained...wisely と、副詞（wisely）は動詞（explained）を修飾しているのに対して、文 b) では、副詞（wisely）が文（He explained things.）を修飾している「文修飾の副詞」なので「╱Wisely, he ╲explained things. とも言える」と述べている。

（補足）天満が『英語の語法：修飾（下）』(p.30)（以後、天満『語法』と表記）の中で、Paul Roberts の文に対する修飾語について次のように紹介している。

「Paul Roberts は、文に対する修飾語を説明するにあたって、いわゆる変形文法理論を応用している。(*English Syntax*, p.313)」

そこで、Lee の上記の文を取り上げて、それを当てはめて説明をすると次のようになる。

Wisely, he explained things. は二つの基本文から派生しているとする。すなわち、挿入文としての It was wise. と、母体文の he explained things 2 文から派生したものだとする。すなわち、挿入文の形容詞 wise を取り出して ly を付し、それを母体文の前につけて出来上がった結末が Wisely, he explained things. といえる。Wise なのは he でもなければ、explained things という動詞句でもなく、he explained things という事実をさすのである。

また、天満は『語法』(p.31) の中で、Archibold Hill から次の例文

a) Really, I like John. b) I like – really – John. c) I like John, really. を借用して、「文に対する修飾語の特徴は、それが独立した音調を持って他と区切りがある点である。すなわち文に対する修飾語の前あるいは後（または両者）には必ず区切りがあり、軽い休止を置くのが普通である。」と述べている。

上に見られるように、音調やポーズを適切に使うことにより、really は文中で自由に使える

ということである。

Q11）次の only を含む a), b) の 2 文を「音調記号」から判断して、違いを述べなさい。

a) We —only ╲looked at the ＿castle.　　正解率 37(33.6%)

b) We —only looked at the ╲castle.　　正解率 48(43.6%)

(Lee: *Intonation*, p.63)

文 a) では、only は looked を修飾して、「(城を見ただけで) 中には入らなかった」という意味であり、文 b) では、only は castle を修飾して、「城以外は何も見なかった」という意味である。

（参考）以前は only は、書き言葉では様々な位置に来ていたけれど、現代の話し言葉では動詞の前に固定されている。従って、only に修飾される語は音調によって決まる。

(Palmer & Blandford : *A Grammar of Spoken English*, § 386)

そして、次のような例をあげ、音調で区別している。

1) I —only ╲saw　my　friend ╱yesterday.

2) I —only　saw ╲my　friend ╱yesterday.

3) I —only　saw　my ╲friend ╱yesterday.

4) I —only　saw　my　friend ╲yesterday.

上で見るとおり、1) では saw を、2) では my を、3) では friend を、4) では yesterday を only が修飾していることを示している。(なお、原文は発音記号で書かれていたのをそれぞれに相当する文字に書き替えた。)

（補足）（1）only は通例修飾する語・句・節の直前か、直後に置く。（2）《略式》では動詞の直前「be 動詞、助動詞はその後］に置かれる傾向があり、only に修飾される語は強く発音される。(小西『ジーニアス英和辞典』大修館)

Q12）次の文 a) b) を音調記号「下降（╲）、上昇（╱）、休止（⋮）］などを参考に意味の違いを述べなさい。

a) The ╱daughter, ⋮ who was recently ╱married, ⋮ —came to ╲see them.

b) The —daughter who was recently ╱married ⋮ —came to ╲see them.

（正解率）　a) 40(36.4%)、b) 57(51.8%)

文 a) では、The daughter は who was recently married に限定されることなく、音調あるいはポーズで他から区別される。daughter と married の後が、普通、上昇調になり、ポーズが置かれる。(There is only one daughter.)

文 b) では、The daughter は who was recently married に限定される。The daughter から

married まで一気に話される一つの音調群である。(There is more than one daughter.)

(Lee:*Intonation*,p.60)

(補足) a) The man who called while you were out left a message.

b) Mr. Smith, who called while you were out left a message.

a) who 以下の限定があってはじめて、どういう man かがわかる。b) who 以下の追加的叙述がなくても、Mr. Smith と言えばわかっている。

(江川『英文法解説』金子書房、p.67)

Q13) 次の文を読む場合、必要な箇所には区切り［コンマ (,)、ピリオド (.)］を打ち、必要な文字は大文字に書き替え、赤のエンピツなどで示しなさい。

one of the luckiest things that can happen to you in life is i think to have a happy childhood i had a very happy childhood

	(正解率)
1. one の o を大文字で書く	96(87.3%)
2. is の後にコンマを置く	19(17.3%)
3. 初めの i を大文字で書く	87(79.1%)
4. think の後にコンマを置く	10(9.1%)
5. 初めの childhood の後にピリオドを打つ	75(68.2%)
6. 2番目の i を大文字で書く	102(92.7%)
7. 2番目の childhood の後にピリオドを打つ	86(78.2%)

(正解)

One of the luckiest things that can happen to you in life is, I think, to have a happy childhood. I had a very happy childhood.

I think が挿入され、その前後にコンマを打つことを知らない解答［is の後にコンマなし 63(57.3%)、think の後にコンマなし 94(85.5%)］には驚きである。結果として言えることは文法をあまり知らないということであろう。

(補足) 英語の書き言葉は、他のすべての言語がそうであるように、話し言葉の聴覚的記号を視覚的な記号に移し変えたものである。それには次の基本的な約束事から成っている。

(1) 横線の上に左から右に書く。

(2) ラテン文字 (ローマ字) を使う。大文字と小文字がある。

(3) 単語はラテン文字の小文字を並べて書く。ただし、固有名詞は大文字で始める。

(4) 単語と単語の間にスペースを置く。

（5）文は大文字で始める。

（6）文の終わりには終止符（ピリオド）を置く。ただし、疑問文の場合には疑問符（クエスチョン・マーク）を置く。

（7）文の途中の区切りには読点（コンマ）を置く。

（土屋・広野『新英語科教育法入門』研究社、p.57）

（追加）Iは常に大文字で書く（見落とされたり隣の語にくっついてしまうのを避けるため）

（小西『ジーニアス英和辞典』大修館、p.841）

4．おわりに

「どの発音記号を頼りに自信を持って発音できるのか」といった具体的な内容にまで質問をすることにより、本学入学以前の音声教育を確かめた。

本文で述べた母音ばかりでなく子音においてもまた英語の音と日本語の音は一対一の対応はしないのである。例えば、/r/ や /l/ は「ラ行の子音」の音で代用しがちであるが、これとは全く違う音である。「ラ行の子音」は、弾音で舌先が歯茎後部あるいは硬口蓋前部に接触して発音されるのに対し、英語の /r/ は、舌先が口腔内のどこにも接触しないし、/l/ は舌先が歯茎にしっかりと接触して発音され、「ラ行の子音」のように弾かない。

単語のアクセントもカタカナ英語の氾濫で、平板な日本式の発音となり、どの音節を強く発音するのかも不明であるし、音調に関して言えば、下降調と上昇調の2つの基本的な音調しか学んでいないはずなのに、疑問詞で始まる疑問文や感嘆文また祈願文では正解率が7割に届かなかった。

なお、Q10）b) He ╲explained things, ╱wisely. の正解率が1.8％と極端に悪かったのは、英和辞典［レキシス、グローバル、ライトハウスなど］には、

Happily, he did not die.「運よく彼は死ななかった」と、「文修飾の副詞」が必ず文頭に来ている例が挙げられている結果ではないか。

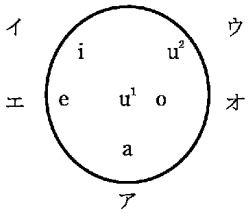
また、大切な英語のリズムについてもあまり身についているとは思えない。今回は実証できなかったが、話し言葉で重要な働きをする音の脱落、連結、同化などは学ばなかったのであろうことは、文を読ませてみれば直ぐ分かる。

注

1）発音表記に関しては、中学校［高等学校］学習指導要領では、「音声指導の補助として、発音表記を用いて指導してもよいものとする。」（中学校）［発音表記を用いて指導するよう考慮するものとする。］

（高等学校）

2）



（綴り字：例語）

a: America/əmérıkə/ では、「弱いア」、u: chorus/ kɔ́:rəs/ でも、「弱いア」、o: lemon/ lémən/ では、「ア」に「オ」の感じが加わった弱い母音、e: element/ éləmənt/ では、「エ」にわずかに「ア」が加わった感じの弱い母音、i: animal/ǽnəməl/ では、イともウともアともつかない、まったく曖昧な音色である。

その他、綴り字が ai: captain/ kǽptən/ では、「エ」にわずかに「ア」が加わった感じの弱い母音、ou: famous/ féɪməs/ では、「弱いア」の音色である。

（竹林『英語発音に強くなる』岩波ジュニア新書、pp.75, 76 および、竹林他『初級英語音声学』大修館、p.72）

3）従って、アクセントのない音節は、逆に、弱く、低く、短い。日本語のアクセントは音の高さを主要素にしたものなので、日本人学習者にとっては（1）と（3）の要素がなかなか習得が難しい。音節を強く発音するということは、子音も含めて強く発音するということなので、日本語の場合よりも絶対的な呼気量が必要となる。（長澤『教師のための英語発音』開文社、p.88）（以後、『教師の発音』と表記）

参考文献

五十嵐　新次郎『英米発音新講』（改訂新版）南雲堂、1983。
今井　由美子他３名『英語音声学の基礎』北星堂、2004。
上田　功他２名『基礎からの英語音声学』大学書林、1995。
大高　博美『英語音声教育のための基礎理論』成美堂、1998。
緒方　勲監修『英語音声指導』（ハンドブック）東京書籍、1995。
加島　祥造他２名『カタカナ英語辞典』研究社、1987。
片山　嘉雄他２名『英語音声学の基礎』研究社、1996。
川越　いつえ『英語の音声を科学する』大修館、1999。
兼子　尚通・鳥居　次好『英語の発音』大修館、1982。
酒井　邦秀『どうして英語が使えない？』ちくま学芸文庫、2003。
杉森　幹彦他３名『音声英語の理論と実践』英宝社、1997。
東後　勝明『英会話のリズムとイントネーション』金星堂、1993。
竹林　滋他３名『初級英語音声学』大修館、1991。
竹林　滋『英語発音に強くなる』（岩波ジュニア新書）岩波書店、1991。
長澤　邦紘『教師のための英語発音』開文社出版、1987。
中郷　安浩・中郷　慶『こうすれば英語が聞ける』英宝社、2001。

長谷川　博『英語科教育法の授業での音声教育』関西外大研究論集、2004。
藤井　健三『現代英語発音の基礎』研究社、1986。
松坂　ヒロシ『英語音声学入門』研究社、1992。
三宅川　正・増山　節夫『英語音声学』（理論と実践）英宝社、1994。
渡辺　和幸『コミュニケーションのための英語音声学』弓プレス、1995。
江川　泰一郎『英文法解説』金子書房、1972。
木村　明『英文法精解』培風館、1964。
智原　哲郎他３名：ENGLISH ENERGIZER、北星堂、1998。
長谷川　瑞穂・木全　睦子『学習者中心の最新英文法』朝日出版、1999。
天満　美智子『英語の語法・修飾（下）』研究社、1968。
長谷川　博『外国語をカタカナ表記する弊害』関西外大研究論集、1998。
ＬＬニュースレター第３号、関西外大短大部（穂谷）語学教育センター、1997。
池田　紅玉他２名『英検・TOEIC に役立つリスニング』南雲堂、2004。
高等学校学習指導要領解説　外国語編・英語編（文部省）教育出版、1998。
土屋　澄男・広野　威志『新英語科教育法入門』研究社、2000。
Bowen, J. D. / 河野　守夫訳『英語発音の型』金星堂、1991。
Lee, W. R.: *An English Intonation Reader* (Macmillan) 1960.
O'Connor, J. D.: *Better English Pronunciation* (Cambridge Univ. Press) 1980.
Palmer, H. E. & Blandford, F. G.: *A Grammar of Spoken English* (Heffer/Cambridge) 1959.
木原　研三・福村　虎治郎編『新グローバル英和辞典』三省堂、1994。
小西　友七主幹『ジーニアス英和辞典』大修館、1988。
花本　金吾他２名編『レクシス英和辞典』旺文社、2003。
竹林　滋・小島　義郎『ライトハウス英和辞典』研究社、1990。
CAMBRIDGE *International Dictionary of English* (Cambridge Univ. Press) 1995.
LONGMAN *Dictionary of Contemporary English* 3rd ed. (Longman) 1995.
OXFORD *Advanced Learner's Dictionary* 6th ed. (Oxford) 2000.

（はせがわ・ひろし　短期大学部助教授）